

# この一投こそわが人生



稲沢グランドボウル①

## 開業以来の常連



①1972年の開業当時から通う川口さん  
②1フロアに116レーンが並び、ギネス世界記録に認定されている稲沢グランドボウル  
=いずれも稲沢市井之口大坪町で



人生で何十万投目になるのだろう。淡々と投げたボールはレーンでいつものような弧を描き、白いピンをはじき飛ばす。多くの人は知らないだろう。稲沢グランドボウル(稲沢市井之口大坪町)の五十七、五十八レーンに陣取るこの男性が、五十年、ひそかに道を究めてきたことを。

今月初め、開場前の午前八時半。「従業員よりも来るのが早いんだわ」。ユニホーム姿で現れた川口治一さん(モモはそう笑った。一宮市の自宅から週三日、自転車で三十分かけて通う。開業当時の常連に、この生き字引ですよ)と従業員たちも一目置く。勉強は苦手だった。体を動かすのは好きだったが、スポーツを気軽に楽しむような時代ではない。中学卒業後、一宮駅前の食堂に就

職。月一回の休みに、近くのボウリング場に遊びに行くのが気晴らしだった。根城を定めたのは、二十代半ば。三菱電機稲沢製作所に転職した数年後、二百三十二レーン(当時)を備えた稲沢グランドボウルがオープンした。

時はボウリングブーム。同僚に誘われ、通うようになった。「投げるたびにスコアが上がるのが、うれしくて」。仕事を午後五時に終えると、週二、三日、足を運び、多い日は十五ゲーム投げた。好きが高じて社内でもボウリング同好会もつ

つた。ボールを投げ、ピンを倒す。単純なようで確認作業は無数にある。複数あるマインボールの選択。レーンのオイルの塗り具合で曲がり幅が変わり、わずかなフォームの狂いで、軌道がずれる。同じ一投は決してなご、飽きることはなかった。

退職し、時間ができると、通う日は週五日に増えた。体力は落ちてきたが、技術で補う面白みが生まれ、一ゲーム十二投連続でストライクを出すパーフェクトを、十日間で二度達成したのも六十代に入ってからだ。

今、あらためて実感する投げられる喜び。今月、約五年ぶりのパーフェクトに迫った。最後の一投で一本残し、生涯二十三度目の瞬間を逃すと、「くそー、うまくいかないねえ。また頑張らないと」。求める理想の一投は、まだ先にある。悔しそつだが、うれしそつでもあった。(牧野良実)

(このシリーズは全四回で)

なり、がん、心不全と病に襲われた。それでも「ボウリングのない人生なんて」と投げ続けてきたが、昨年春、思いがけずレーンから離された。新型コロナウィルス。緊急事態宣言が出され、ボウリング場が約一カ月、臨時休業した。用もななく近所のスーパーを歩き回り、時間をつぶした。

## 「世界一」の裏側支える



機械を点検する田代さん―稲沢市井之口大坪町の稲沢グランドボウルで



### 稲沢グランドボウル②

### 熟練のメカニック

工場のような空間を、青の作業着の男性が行ったり来たりする。機械の中では、ピンやボールがぐるぐる回る。ちよつとした音の違いや足元の振動が異常を

示すサインという。「どこかの部分がおかしくなりそうか分かるんです」。長年、体に染み付けた感覚が判断を支える。

一フロアに百十六レインが並び、ギネス世界記録に認定される稲沢グランドボウル。国内最大規模の大会も開かれる一大施設だ。照明を浴びたレインの脇の扉を開けると、メカニックの田代勝三さん(50)の仕事場がある。

そこでは、レジャーの空気が一変する。ピンを並べ、ボールを戻す高さ二層ほどの機械が、レインの数だけ並ぶ。端から端まで約二百層。歩いて点検しながら、時折、ライトで照らして機械に体を突っ込む。旧清洲町(現清須市)で生まれ育ち、子どもの頃から、家族で遊びに来ていた。当時は一番軽いボールでも八磅(約三・六キ)。

親に言われ、頑張つて片手で投げたが、「ガター(溝)の掃除ばかりしてたっけ」と懐かしむ。

裏側の住人となったのは、二十一歳の時。高校卒業後、電気工事や鉄工所の

仕事が続きせず、グランドボウルのメカニックの求人が目にとまった。人と接するのは苦手だが、工作や部品の組み立ては好き。そんな自分に向いているかも、と思えて入社した。

仕事中は、多くの時間を裏側で過ごす。ストライクを取って歓声を上げる家族連れ、スコアを競って盛り上がる団体客の姿もほとんど目にすることはない。客足を感じるのは、動いている機械の数。入社当時はフル稼働する日が多く、モーターの熱で裏側の温度も上がった。「昔は冷暖房がなくて。冬はありがたかったけど、夏はたまらなかつたなあ」と笑う。

ボウリングブームが去り、最近では機械が止まったままの時間も増えた。それでももやもやしてくる人たちのため、整備を万全にする心掛けは変わらない。

当たり前のようにボールが戻ってこなければ、ピンが並ばなければ、もう来ようとは思ってられないだろう。「小さい時から家族で来てたら、大人になっても続けてくれるはず」。わが子のように日々、変化を見てきた機械たちが、また一斉に動く日を待ちわびる。

(牧野良美)